加藤陽子の
近代史の扉

神話の国で「自分の木」を思う
［天皇のあり方熟議のとき］

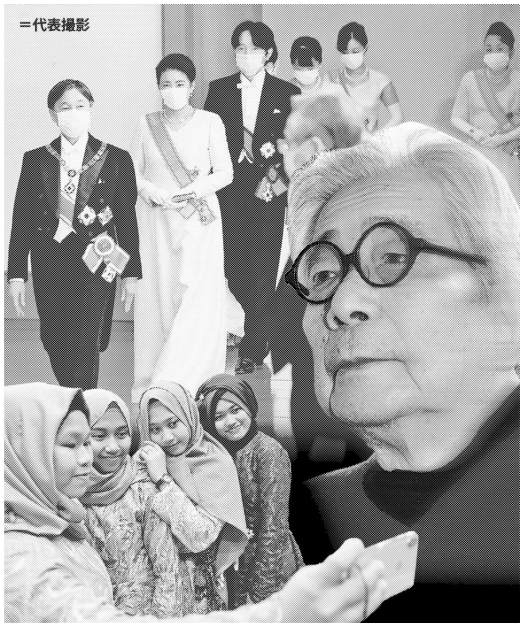
皇居の新年一般参賀は感染症拡大のため中止となった。それに代えて宮内庁は、天皇と皇后が並んで人々に語りかけるビデオメッセージを1月1日に公開した。天皇は悠然たる口調で、災害や感染症による犠牲者を悼み、医療従事者の奮闘に感謝し、必ずや難局が克服されるものと信じ、人々の安寧と平和を祈念すると述べた。

注目すべきは、画面のこちら側へ向けて天皇が「皆さん」と呼びかけ、難局を克服する主体を「私たち人類」と称したことだろう。さらに、皇后は結びの言葉を述べる際、「皆様」と呼びかけた。これらの所作の含意を政治学者原武史氏は、語りかける対象を国民に限らない意思の表れと読み解いた。同じ元旦の言葉でも、1946年の「新日本建設に関する詔書」（人間宣言）で、「我国民（わが）」という呼称が何度も用いられていたことを想起すれば、説得的な解釈だ。

現在、日本に住む在留外国人は約288万人いるという。だが日本は、労働者送出国との間で2国間協定を結ばずに技能実習制度を運用してきた国であり、新型コロナウイルス禍のなかでは本制度の問題点が幾つも明らかとなった。気がつけば我々は、国民国家の概念の見直しを迫られる社会に生きているといえよう。その事実に私は、「日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」（日本国憲法第1条）である天皇の言葉によってあらためて気づかされた。

天皇のあり方については、国民の側から国へ、時間をかけた熟議を要請する時期に来ていると思われる。まずは過去2度の失われた機会をふりかえっておこう。敗戦後の混乱期には、憲法制定を急ぐ連合国軍総司令部の都合により、国民が熟考する機会はなかった。帝国議会の審議で基本的な論点は出そろっていたのだが。2016年夏の現上皇の退位表明時には、国民の意向は世論調査結果という形で政府の意思決定に影響を与えた。大島理森衆院議長の主導下の国会で、各会派代表者による踏み込んだ議論もなされた（議事録は公開済み）が、1代限りの特別措置法を急ぐ内閣の方針により議論は未完のままに終わった。

ではどうしたらよいのか。第一に、先の各派代表者会議を継承し、国会で時間をかけて議論する場を設けること、これが王道だろう。第二に、すでに着手されてきたことではあるが、天皇と国民の関係性を説明するために動員されてきた神話・伝承・歴史を批判的に分析しておく必要がある。


＝代表撮影

人を動かす言葉の大事さは、コロナ禍を生きる私たちが日々痛感するところだ。文学はフィクションだが、その言葉は実体となって人を動かす。今回は大江健三郎「M／Tと森のフシギの物語」を例に考えたい。ただ、大江の初期短編の酷薄な明晰（めいせき）さを愛する人にとって本書は、題名でつまずきそうだ。Mは女家長を表すメトリアーク、Tは不思議な力を持つトリックスターの頭文字。故郷の四国の村を舞台に、村の神話と歴史が、時代ごとに変容するMとTの組み合わせで語られる。最も面白い組み合わせは、血税一揆を率いたメイスケ母＝Mと童子メイスケ＝Tだろう。

なぜ大江はこの物語を書いたのか。43年ごろ、国民学校の教師が黒板に絵を描いた。彼は大日本帝国の版図、その上方に天皇と皇后の上半身を雲で囲む絵を描いた。お手本通りの絵を期待した教師の意図に反し、小説中の大江少年が画用紙に描いたのは、帝国の版図ではなく故郷の谷間の村であり、天皇と皇后の姿ではなくMとTの姿だった。作者の意図が建国神話の相対化にあったのは間違いなかろう。当時の「初等科国史」の第1章は「神国」と題され、国生み神話が叙述されていた。

大江作品のほぼ全てを読んだ私は、大江の採用した相対化の手法をすぐにも説得的だと思った口だ。だが、ジェンダー分析の視点から鋭い批判を展開した人がいる。仏文学と歴史学を専門とする西川祐子氏だ。編著「戦後という地政学」で氏は大江の用いた二項対立的な性差のメタファーを批判し、そのような叙述は結局、国家の神話に対してネガとポジを反転させたにすぎないとした。この批判にはうなされた。戦前期の皇国史観を否定するのに急なあまり、戦後民主主義が安易な民衆像を求めた過誤をえぐっているからだ。

そう理解したうえで私は、題名の後半部分「森のフシギの物語」に再度着目したい。大江は、MとTの創出以外にもう一つ、国家の神話を相対化しうる観点を物語に埋め込んでいた。それは森の宇宙観と命名すべき思想である。全ての人はどこかの森に「自分の木」を持つという夢想。命は木から生まれ、死んだ魂は木へと還る。天皇の神話を、国家と民族の起源と結んだ過去を持つこの国で、「自分の木」を思う行為は、国の神話の見事な相対化たりうるはずだ。

（次回は2月20日に掲載）

かとう・ようこ　1960年生まれ。東京大教授（日本近代史）。著書「それでも、日本人は『戦争』を選んだ」「戦争まで」など。